

長野県松本市

*TAIHOHARA*

# 大 輔 原 遺 跡

—第 10 次発掘調査報告書—

2020.3

松本市教育委員会

長野県松本市

*TAIHOHBARA*

# 大 輔 原 遺 跡

—第 10 次発掘調査報告書—

*2020.3*

松本市教育委員会

## 例言

1 本書は、平成30年4月10日～6月12日に実施された、長野県松本市元町三丁目312-3に所在する大幡原遺跡の第10次発掘調査報告書である。

2 本調査は、松本赤十字乳児院建設事業に伴う緊急発掘調査であり、松本赤十字乳児院より松本市が委託を受け、松本市教育委員会が発掘調査、整理・報告書作成を行ったものである。

3 本書の執筆分担については、以下のとおりである。

第Ⅱ章：直井雅尚、第Ⅲ章第3節1・3：古林舞香、第Ⅲ章第3節2：白鳥文彦、その他：小山奈津実

4 本書作成にあたっての作業分担は以下のとおりである。

遺物洗浄・注記 内田和子・中澤温子・洞澤文江・三澤栄子

遺物保存処理・接合復元 内田和子・中澤温子・洞澤文江・三澤栄子

遺物実測・トレース (土器) 柏原佳子・竹内直美・竹平悦子・直井植之介・宮本章江

(石器) 白鳥文彦・直井植之介・原田健司

(金属製品) 洞澤文江・前沢里江

遺構図整理・トレース 荒井留美子

写真撮影 (遺構) 小山奈津実・直井雅尚・古林舞香

(遺物) 宮嶋洋一

一覧表作成 (遺構) 荒井留美子・小山奈津実

(土器) 古林舞香

(石器) 白鳥文彦

(金属製品) 古林舞香・洞澤文江

DTP 荒井留美子・小山奈津実・白鳥文彦・直井植之介・直井雅尚・原田健司・古林舞香

5 本書で用いた略記は次のとおりである。

第○号住居址→○住、第○号土坑→土○、第○号ピット→P○、第○号石列址→石列○

6 図中で使用した方位は真北を示す。また、遺構図中に示した国家座標値(世界測地系・第8系)は、東北太平洋沖地震後の補正值である。

7 図類の縮尺は、遺構：1/80、土器：1/4、石器：2/3・1/3、金属製品：1/2で掲載した。写真図版の縮尺は、遺構：不同、遺物：石器は2/3・1/3、その他は不同で掲載した。

8 本書では以下のものをスクリーントーンで表した。

遺構：焼土・被熱範囲 

遺物：黒色土器  タール・煤 

9 遺構図の各々の住居址は基本カマドを天として掲載するが、カマドが確認できない住居址及び重複する住居址は位置の把握を容易にするために北を天として掲載した。

10 土層色名は、農林水産省農林水産技術会議事務局 監修・財団法人日本色彩研究所 色票監修『新版標準土色帖』に準拠している。

11 土器実測図の断面白抜きは土師器・黒色土器、黒塗りは須恵器・軟質須恵器・灰釉陶器・陶器・磁器を示す。

12 本調査の出土遺物および写真・実測図等の記録類は、松本市教育委員会が管理し、松本市立考古博物館(〒399-0823 長野県松本市中山3738-1 TEL 0263-86-4710 FAX 0263-86-9189)に保管している。

# 目次

例言

目次

第1章 調査経緯	
第1節 調査経過	5
第2節 調査体制	6
第2章 遺跡の環境	
第1節 地理的環境	7
第2節 歴史的環境	7
第3節 過去の調査成果	10
第3章 調査成果	
第1節 調査の概要	13
第2節 遺構	
1 竪穴住居址	16
2 土坑・ピット	17
3 石列	17
第3節 遺物	
1 土器・陶磁器	21
2 石器	30
3 金属製品	31
第4章 総括	32
写真図版	
報告書抄録	

## 表目次

第1表 周辺遺跡一覧表	9
第2表 大輔原遺跡での発掘調査一覧表	11
第3表 竪穴住居址一覧表	18
第4表 土坑一覧表	18
第5表 ピット一覧表	18
第6表 土器・陶磁器観察表	24
第7表 石器一覧表	30
第8表 金属製品一覧表	31

## 写真図版目次

写真図版1 調査区全景	
写真図版2 遺構(1)	
写真図版3 遺構(2)	
写真図版4 遺構(3)、遺物(1)	
写真図版5 遺物(2)	
写真図版6 遺物(3)	
写真図版7 遺物(4)	
写真図版8 遺物(5)	

## 図目次

第1図 調査地の位置と周辺遺跡	8
第2図 大輔原遺跡の過去の調査地	12
第3図 事業対象地と調査区の範囲	14
第4図 調査地の標準土層図	14
第5図 調査区全体図	15
第6図 竪穴住居址(1)	19
第7図 竪穴住居址(2)、土坑、石列	20
第8図 土器・陶磁器(1)	26
第9図 土器・陶磁器(2)	27
第10図 土器・陶磁器(3)	28
第11図 土器・陶磁器(4)	29
第12図 石器	30
第13図 金属製品	31

# 第 I 章 調査経緯

## 第 1 節 調査経過

松本赤十字乳児院（以下「乳児院」という。）により松本市元町三丁目 312- 3 で松本赤十字乳児院建設事業が計画されたが、予定地一帯は周知の埋蔵文化財包蔵地である大輔原遺跡に該当していた。そのため、平成 30 年 1 月 12 日付で、文化財保護法第 93 条に基づく土木工事等のための埋蔵文化財発掘の届出書が乳児院から長野県教育委員会（以下「県教委」という。）宛に提出された。これを受け、松本市教育委員会（以下「市教委」という。）では平成 30 年 2 月 27 日～2 月 28 日に事業地内で試掘確認調査を実施した。その結果、古墳時代～平安時代の遺物を伴う竪穴住居址などを検出し、対象地内の広範囲に遺跡が残存していることが確認された。このため、建設工事により遺跡の破壊が避けられない旨の意見を付して、2 月 27 日付で届出書を県教委に達達し、3 月 6 日付で県教委から埋蔵文化財の記録保存のための発掘調査実施の通知を受けた。また、事業者である乳児院と協議を行い、発掘調査とこれに係る事務処理については市教委が実施することとし、乳児院と松本市の間に 4 月 2 日付で発掘調査業務の委託契約が締結された。

現地での発掘調査は平成 30 年 4 月 10 日～6 月 12 日に実施した。調査終了後、平成 30 年 6 月 12 日付で県教委に発掘調査終了報告書を提出した。また、6 月 12 日付で埋蔵物発見届を松本警察署に提出し、6 月 28 日付で県教委より埋蔵物の文化財認定及び出土品の帰属についての通知を受けた。それを受け平成 31 年 1 月 7 日付で出土文化財譲与申請書を県教委に提出し、1 月 15 日付で出土文化財の譲与についての通知を受けた。

本発掘調査に係る文書等の記録は以下のとおりである。

### <平成 29 年度>

- 1 月 12 日 「土木工事等のための埋蔵文化財発掘の届出」を乳児院が市教委に提出
- 2 月 27 日～2 月 28 日 市教委が試掘確認調査実施
- 2 月 27 日 「土木工事等のための埋蔵文化財発掘の届出」を市教委が県教委に達達
- 3 月 6 日 「周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等について」県教委から乳児院と市教委に通知

### <平成 30 年度>

- 4 月 2 日 乳児院と松本市が埋蔵文化財発掘調査委託契約を締結
- 4 月 10 日～6 月 12 日 市教委が発掘調査実施
- 6 月 12 日 「埋蔵物発見届」「埋蔵文化財保管証」を市教委が松本警察署、県教委に提出
- 6 月 12 日 「発掘調査終了報告書」を市教委が県教委に提出
- 6 月 28 日 「文化財の認定及び県帰属について」県教委から市教委に通知
- 1 月 7 日 「出土文化財譲与申請書」を市教委が県教委へ提出
- 1 月 15 日 「出土文化財の譲与について」県教委から市教委に通知
- 3 月 19 日 松本市が乳児院に埋蔵文化財発掘調査完了報告書提出

### <令和元年度>

- 4 月 1 日 乳児院と松本市が埋蔵文化財発掘調査委託契約を締結

## 第2節 調査体制

---

### <平成30年度>

調査団長 赤羽郁夫（松本市教育長）

調査担当 小山奈津実（主事）、直井雅尚（嘱託）、古林舞香（同）

事務局 松本市教育委員会文化財課

大竹永明（課長）、三村竜一（埋蔵文化財担当係長）、百瀬耕司（主査）、吉見寿美恵（嘱託）

### <令和元年度>

調査団長 赤羽郁夫（松本市教育長）

報告書担当 小山奈津実（主事）、直井雅尚（嘱託）、白鳥文彦（同）、古林舞香（同）

事務局 松本市教育委員会文化財課

大竹永明（課長）、竹内靖長（埋蔵文化財担当係長）、百瀬耕司（主査）、吉見寿美恵（嘱託）

### <調査員>

宮嶋洋一

### <発掘協力者>

伊藤節子、今井文雄、関谷昌也、西村一敏、林秋好、百瀬二三子、矢野芳徳

### <整理協力者>

荒井留美子、市川二三夫、内田和子、柏原佳子、竹内直美、竹平悦子、直井慎之介、中澤温子、洞澤文江、前沢里江、三澤栄子、宮本章江



## 第Ⅱ章 遺跡の環境

### 第1節 地理的環境

大幡原遺跡は松本市街の東方を北から南へまっすぐに流下する女鳥羽川下流域の左岸に位置する。女鳥羽川に沿うように南北約1kmの範囲に細長く広がり、地籍は北側が浅間温泉一丁目、中央部が南浅間と大村、南部が横田から元町三丁目にまたがっている。今回の調査地は南北に長い遺跡の南側やや中央寄り、標高621m付近に位置する。本遺跡が展開する一帯は北の浅間温泉から南の横田地籍まで続く女鳥羽川左岸の微高地で南に向かって緩傾しており、標高は遺跡北部で637～638m、南部で614～615mを測る。浅間温泉南部周辺や東方の山地に発する小河川はすべてこの微高地を横切ることなく南へ流下し、横田、惣社地籍に至って西流する湯川に合している。この微高地の東側には山麓地帯との間に、狭い範囲ではあるが北から南、南東へと延びる水はけの悪い低地があったが、現在はほ場整備工事や宅地造成などによって不明瞭になっている。また、微高地の西側を南流する女鳥羽川はほぼ南北一直線のきわめて不自然な流路をとっており、これは近世以前に大規模な人為的改変を受けて河道が現在地に定められた結果と考えられる。本遺跡よりも下流部では河道下から縄文、弥生、古墳の各時代の遺構や遺物が発見されており、改変以前の本来の女鳥羽川の主要流路は本遺跡付近、あるいはやや上流から南南西に向かっていった可能性を想定したい。原始、古代にあっては本遺跡やその周辺への影響は現況とはかなり異なっていたと考えるべきであろう。

### 第2節 歴史的環境

#### 1 遺跡分布の概要（第1図）

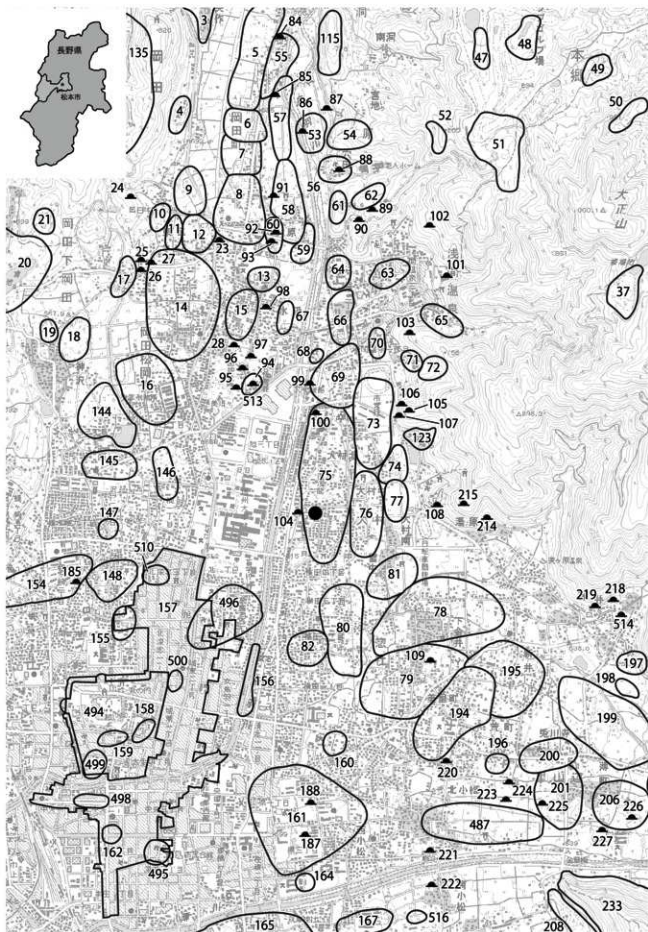
本遺跡が載る前述の微高地には多くの遺跡（第1図 64・66・69・73～77・80～82等）が連なっており、「浅間・大村・横田微高地上遺跡群」ともいうべき在り方をみせる。遺跡の時期は縄文時代中期から中世までの多岐にわたり、各時代ともに居住適地として利用されてきたことがわかる。また、東方の山上、山麓には桜ヶ丘古墳、妙義山古墳群、桃仙園古墳など中期に遡るとみられる古墳が築かれており、一帯の開発の古さを物語ると共に政治的な重心の存在を暗示する。さらに、古代の文献に残る駅名から令制東山道の通過地点と推定されており、大村や浅間温泉、南隣の惣社地籍は信濃国府の推定地にも挙げられている等、信濃国の古代史を探るうえできわめて重要な地域である。

#### 2 周辺の発掘調査成果

本遺跡周辺でのこれまでの発掘調査で確認された主な考古学的成果を時期別にみてみたい（カッコ内の数字は第1図の遺跡番号を示す）。

縄文時代は中期の竪穴住居址が柳田遺跡（69）、大村塚田遺跡（81）、大村立石遺跡（76）で発見されている。特に大村塚田遺跡では中期後葉の竪穴住居址46軒が検出され、直径70～80mの環状集落をなすものと推定されている。また、大村立石遺跡では中期末の竪穴住居址2軒が発見されている。晩期は柳田遺跡と芝田遺跡で末葉の土器がまとまって出土している。

弥生時代は横田古屋敷遺跡（82）で中期後半の竪穴住居址と墓址、大村古屋敷遺跡（74）で後期の集落が発見されている。横田古屋敷遺跡の墓址は4基で、すべてが中期後半の栗林式土器に伴う礫床木棺墓であった。複数体の火葬人骨を再葬したと推定される特異なもので、当地域の特徴的な葬法として注目されている。大村古屋敷遺跡は微高地の東端に位置して山麓との間の湿地に臨む立地にある。発見された竪穴住居址



●：今回の調査地点、数字は松本市遺跡台帳記載の遺跡番号

第1図 調査地の位置と周辺遺跡 (S=1/25,000)



第1表 周辺遺跡一覧表

No	遺跡名	種別	時代	No	遺跡名	種別	時代
3	矢作遺跡	集落	縄・中	95	水波2号古墳	古墳	古
4	向山遺跡	集落	弥	96	水波3号古墳	古墳	古
5	岡田遺跡	集落・その他の墓	縄～中	97	水波4号古墳	古墳	古
6	二反田遺跡	集落	古・平・中	98	水波5号古墳	古墳	古
7	下山遺跡	集落	古～中	99	大原敷1号古墳	古墳	古
8	岡田西側遺跡	集落・生産	縄・古～平	100	大原敷2号古墳	古墳	古
9	岡田宮の前遺跡	集落・生産	弥・奈～中	101	横舌人古墳	古墳	古
10	岡田神井遺跡	集落	弥・平	102	御殿山古墳	古墳	古
11	岡田堀ノ内遺跡	集落	平・中	103	桜ヶ丘古墳	古墳	古
12	岡田中道遺跡	集落	平	104	国司塚古墳	古墳	古
13	杵取遺跡	集落	縄・平	105	妙義山1号古墳	古墳	古
14	岡田松河遺跡	集落	縄・古～平	106	妙義山2号古墳	古墳	古
15	松岡七丁目遺跡	集落	古・平	107	妙義山3号古墳	古墳	古
16	トウコン原遺跡	集落	縄・古～平	108	桃山岡古墳	古墳	古
17	天神ノ木遺跡	集落	平	109	惣社車塚古墳	古墳	古
18	笠原遺跡	集落	奈・平	115	早落城址	城跡	中
19	土田遺跡	集落	平	123	大村新切古家址	家跡	古
20	塩合池遺跡	集落	旧・縄・古・平	135	北郷古家址群	家跡	縄
21	御水殿遺跡	集落	平	144	狐塚遺跡	集落	縄・古～平
23	岡田跡塚古墳	古墳	古	145	旧持の場西遺跡	集落・その他の墓	縄・古～中
24	清水入り古墳	古墳	古	146	元原遺跡	集落	古～平
25	矢崎1号古墳	古墳	古	147	沢村北遺跡	集落	弥
26	矢崎2号古墳	古墳	古	148	沢村北遺跡	集落	縄～平
27	矢崎3号古墳	古墳	古	154	横ヶ崎遺跡	集落・その他の墓	奈・平
28	松岡古墳	古墳	古	155	日町遺跡	集落	縄・古
37	番場遺跡	集落	平	156	女鳥羽川遺跡	集落	縄～古
47	栗和田遺跡	集落	縄・弥・平	157	松本城下町跡	町屋・武家地・寺社	中・近
48	すまず池遺跡	集落	縄	158	丸の内遺跡	集落	縄
49	新田原遺跡	集落	古	159	大名町遺跡	集落	縄・中
50	本郷高松遺跡	集落	縄・平	160	四ツ谷遺跡	集落	弥・奈・平
51	南堤遺跡	集落	縄・弥・平	161	野町遺跡	集落・その他の墓	古～中
52	古屋清水遺跡	集落	縄・平	162	本町南遺跡	集落	古～中
53	跡塚田遺跡	集落	縄	164	塚橋遺跡	集落	縄・平
54	宮地遺跡	集落	縄	165	筑摩遺跡	集落	古～中
55	火渡し遺跡	集落	縄・奈・平	167	筑摩北田原遺跡	集落	古・平
56	穴田前遺跡	集落	古～平	185	御道塚古墳	古墳	古
57	原形遺跡	集落	奈～中	187	御塚1号古墳	古墳	古
58	宮ノ上遺跡	集落	奈～中	188	御塚2号古墳	古墳	古
59	原五反田遺跡	集落	弥・古・平	194	里山辺下原遺跡	集落	古～平
60	下屋敷遺跡	集落	縄・古	195	新井遺跡	集落	弥～平
61	北の宮遺跡	集落	縄	196	笠野遺跡	集落	弥・平
62	堀尾遺跡	集落	縄	197	藤井山田遺跡	集落	平
63	鳥居前遺跡	集落	弥・古	198	藤井遺跡	集落	平
64	本郷上高田遺跡	集落	縄・古・平	199	堀の内遺跡	集落・その他の墓	縄～中
65	大倉寺遺跡	集落	弥	200	栗川寺遺跡	集落	古～平
66	本郷高田遺跡	集落	縄・古・奈	201	針塚遺跡	集落・その他の墓	縄・弥・奈～中
67	水波西側遺跡	集落	縄～古	206	神町遺跡	集落	縄・平・中
68	芝田遺跡	集落	縄・弥・奈・平	208	林山殿遺跡	集落	縄・平・中
69	柳田遺跡	集落	縄・奈・平	214	御母家1号(里山辺5号)古墳	古墳	古
70	新南南遺跡	集落	縄	215	御母家2号古墳	古墳	古
71	貞観寺遺跡	集落	古・平	218	藤井1号(里山辺8号)古墳	古墳	古
72	飯沼遺跡	集落	古・平	219	藤井2号(里山辺15号)古墳	古墳	古
73	大村遺跡	集落	弥～中	220	笠野(里山辺1号)古墳	古墳	古
74	大村古原敷遺跡	集落・その他の墓	弥～中	221	北河原屋敷(里山辺11号)古墳	古墳	古
75	大輪原遺跡	集落	古～平	222	中上(里山辺10号)古墳	古墳	古
76	大村上道遺跡	集落	縄・古・奈・平	223	大塚1号(里山辺2号)古墳	古墳	古
77	大村前田遺跡	集落	弥～平	224	大塚2号(里山辺3号)古墳	古墳	古
78	惣社遺跡	集落	縄・古・平	225	針塚(里山辺4号)古墳	古墳	古
79	宮北遺跡	集落	弥・古・平・中	226	古宮(里山辺16号)古墳	古墳	古
80	横田遺跡	集落	縄・平	227	里山辺藤塚(里山辺17号)古墳	古墳	古
81	大村原田遺跡	集落	縄・弥	233	林城址(大城・小城)	城跡	中・近
82	横田古原敷遺跡	集落・その他の墓	弥・古・平	487	北小松遺跡	集落	平
84	山城古墳	古墳	古	494	松本城跡	城跡	中・近
85	高根塚古墳	古墳	古	495	天神西遺跡	集落	古
86	跡塚田古墳	古墳	古	496	岡の宮遺跡	集落	弥・古・平
87	土取塚古墳	古墳	古	498	伊勢町遺跡	集落	中
88	穴田古墳	古墳	古	499	土居原遺跡	集落	古
89	本社塚古墳	古墳	古	500	片端遺跡	集落	弥
90	茶臼山古墳	古墳	古	510	笠野遺跡	集落	古・平
91	西原古墳	古墳	古	513	水波遺跡	集落	古・平
92	原下屋敷古墳	古墳	古	514	藤井3号古墳	古墳	古
93	塚原古墳	古墳	古	516	小松下遺跡	集落	古～平
94	水波1号古墳	古墳	古				

旧:旧石器時代、縄:縄文時代、弥:弥生時代、古:古墳時代、奈:奈良時代、平:平安時代、中:中世、近:近世

は17軒で、長方形や小判形の平面プランを持ち、出土した土器から後期中葉から後半に属するものと推定されている。松本市域北東部では最大規模の弥生時代集落址の調査であり、遺構のみが報告されているが、遺物編の刊行が待たれる。

古墳時代は本郷高田遺跡(66)、大村遺跡(73)、大村古屋敷遺跡(74)、大輔原遺跡(75)などで中期と後期の竪穴住居址が発見されている。中期の竪穴住居址は大村古屋敷遺跡で7軒が発見されているのみだが、後期になると本郷高田遺跡で2軒、大村遺跡で7軒、大村古屋敷遺跡で8軒、大輔原遺跡で3軒の竪穴住居址が発見され、集落が微高地上に大きく展開し始めた様子がわかる。古墳では、微高地東方の山上に築かれた桜ヶ丘古墳(103)、妙義山2号古墳(106)が昭和30・31年の発掘調査により竪穴系の埋葬主体を持つ、中期に遡る古墳と判明している。前者からは金銅製天冠、衝角付冑、長方板革綴短甲、刀1、劍5のほか多数の簾、玉類が出土し、後者からも刀3、簾70余、馬具、玉類や耳環などの装身具多数が発見されて、5世紀後半から6世紀にかけての地域の首長級の豪族の墓と推定されている。さらに、今回のエリアからやや東方に外れるが山麓の古墳では丸山古墳が平成3年に発掘調査されており、すべてが積み石で築かれた墳丘と横穴式石室が検出され、6～7世紀代の土器等が出土している。

奈良・平安時代になると、本郷高田遺跡(66)、柳田遺跡(69)、大村遺跡(73)、大村古屋敷遺跡(74)、大輔原遺跡(75)、大村前田遺跡(77)、宮北遺跡(79)など多くの遺跡が確認され、多数の竪穴住居址が発見されている。報告されている竪穴住居址に限っても大村遺跡19軒、大輔原遺跡21軒、大村古屋敷遺跡27軒、大村前田遺跡3軒などで、ほかに未報告のものが100軒以上あり、本遺跡周辺でこの時代に大きな集落がいくつも形成されていたことがわかる。さらに、本郷高田遺跡と柳田遺跡で大形の掘立柱建物(前者は9m以上×6m、後者は11m以上×9m)が発見されており、官衙に関連する特殊な遺構となる可能性がある。大村古屋敷遺跡では緑釉陶器を副葬した墓址が見ついている。遺物では大村遺跡で多数の緑釉陶器と鴟尾を伴う大量の古瓦が出土し、かつて大村廃寺とされた遺跡の再評価が必要となっている。また、大輔原遺跡と大村遺跡では複数の円面硯や把手付硯、大村古屋敷遺跡で銅製八稜鏡、大輔原遺跡で銅製巡方など各種の特殊な遺物の発見が相次いでいる。これらの特殊な遺構、遺物は、大村遺跡、柳田遺跡、本郷高田遺跡、大輔原遺跡の北部など微高地上でも北端部の浅間温泉周辺にまとまる傾向を認めることができ、奈良・平安時代において何らかの特殊な領域がその一帯にあったことを示唆するものと考えられる。

### 第3節 過去の調査成果

本遺跡では今回の調査以前に9次にわたる発掘調査が行われている。調査地点は遺跡の北部と南部(第2図)に限られ、中央部では試掘や立ち合い以外の調査例がない。(各次調査の成果概略は第2表。ただし、未報告の調査次は発掘終了段階で作成された概要調査書に基いているため、今後の整理作業の進捗により内容が修正される場合がある。)

北部の発掘調査は、松本第一高等学校敷地内で体育館や校舎の建て替えに伴う記録保存の4地点(4次、8次A・B、9次)、その東側で市営教員住宅の建設に伴う記録保存の1地点(2次)が行われており、竪穴住居址25軒、掘立柱建物13棟(うち6棟は疑義あり)が確認されている。遺構の時期は7世紀から9世紀に相当する。遺構について特記すべき点は4次調査地点に掘立柱建物が12棟と多いことで、うち6棟については柱穴の不揃いや平面形の歪みから掘立柱建物とするには疑義もあるが、1号、3号、9号の3棟はいずれも2×2間の総柱式で、3号と9号は南北に軸をそろえて並んでいる。倉庫群の存在を匂わせる遺構であり、これらの掘立柱建物がどの時期に属し、どの竪穴住居址などと伴関係にあったか、さらに詳細な検討をしていかななくてはならない。また、2次調査地点の第27号住居址は一辺が8mに及ぶ大形の竪穴

住居地であった。遺物で特記すべきものとしては、2次調査地点で円面硯2点、4次調査地点で円面硯2点、把手付硯1点が出土している。いずれも竪穴住居址からの出土で、把手付硯は完形品であった。他にも2次と4次調査地点から黒笹14号窯式に相当する古い灰軸陶器の碗・皿、2次と9次調査地点からは鈎帯金具がそれぞれ2点と1点出土している。2次と4次の調査地点は東西に40mを隔てるのみの近接した位置にあり、その一帯が北部の調査地群の中でも重要な場所と推定することができる。

南部の発掘調査は今回を含めて8地点（1次、3次A・B、5次A・B、6次、7次、10次）が発掘されており、1次が信濃国府の推定地を探った学術調査であったほかはすべて開発に伴う記録保存で、3次と5次が市営住宅建設、6次が民間開発（集合住宅）、7次が市の福祉関連複合施設建設、10次が今回である。合計で竪穴住居址25軒、掘立柱建物4棟が発見され、時期は7世紀末から10世紀初頭くらいに取まる。調査地によって遺構分布に疎密が大きく、3次A・B区や5次B区で少なく、1次、5次A区、6次では調査地内全域に竪穴住居址が分布した。また、7次は調査地の大半が洪水性の砂礫で破壊されていたが、全体的な遺物量は少なく、まばらな遺構分布だったと推定される。特記すべき点としては、5次A区で掘立柱建物3棟と壁下柱穴が巡る大形の第21号住居址、壁下に30cmほどの平石が2m間隔で巡る第22号住居址が近接して発見されたことで、この調査地点一帯に遺跡南部の小規模な核があるのかもしれない。

本遺跡の以前の調査結果について北部、南部を総体としてみると、竪穴住居址や掘立柱建物の時期は古墳時代後期後半から平安時代前期の範囲に取まり、その期間を中心とした集落遺跡として理解できる。遺跡内での南北の違いは、北部の方がやや古い時期から集落が始まること、円面硯、把手付硯や銅製巡方、初期的な灰軸陶器など特殊な遺物のほとんどが北部の調査地に集中していることなどで、その点では本遺跡の重心は北側にあったといえよう。前項でも述べたように、本遺跡の北部も加わった浅間温泉周辺の遺跡群が極めて特徴的な領域を形成している可能性を、ここでも改めて指摘できるものとする。

#### 参考文献

##### 【大輔原遺跡】

松本市教育委員会 1987『松本市文化財調査報告No.56 推定信濃国府V』

松本市教育委員会 2000『松本市文化財調査報告No.146 大輔原遺跡—松本第一高等学校校舎建替に伴う緊急発掘調査報告書—』

##### 【その他の遺跡】

本郷村 1966『信濃浅間古墳』

松本市教育委員会 1979『松本市大村遺跡群柳田遺跡分布確認調査報告書』

松本市教育委員会 1992『松本市文化財調査報告No.96 松本市大村塚田遺跡』

松本市教育委員会 1993『松本市文化財調査報告No.103 松本市大村古原敷遺跡・前田遺跡』

松本市教育委員会 1993『松本市文化財調査報告No.104 松本市里山辺丸山古墳』

松本市教育委員会 2003『松本市文化財調査報告No.170 板ヶ丘古墳—再整理報告書—』

松本市教育委員会 2005『松本市文化財調査報告No.177 大村遺跡VI』

松本市教育委員会 2012『松本市文化財調査報告No.209 横田古原敷遺跡第1・2次』

長野県史刊行会 1983『長野県史 考古資料編 全1巻(3) 主要遺跡(中・南信)』

松本市 1996『松本市史 第2巻 歴史編1 原始・古代・中世』

第2表 大輔原遺跡での発掘調査一覧表

次	調査年	調査原因	面積	調査成果の概略	特記事項	報告書
1	S61(1986)	学術調査(国府)	285	住5,集石1	7C末~8Cと9Cの住居,国府関連遺構の発見なし	No.56
2	H1(1989)	教員住宅	200	住1,土20	8Cの大形住居,円面硯2,帯金具2	未報告
3	H4(1992)	市営住宅	700	住1,土1,P3,溝2	9Cの住居	未報告
4	H5(1993)	高校体育館	774	住12,建12,土6,溝1	7~9Cの住居と掘立,円面硯2・把手付硯1	No.146
5	H6(1994)	市営住宅	887	住3,建3,土3,P46,溝2,墓2(古代1,中世1)	8~9Cの住居,壁下柱穴を持つ住居あり	未報告
6	H7(1995)	共同住宅	532	住7,建1,土2,P42,壱3,溝路1	9~10C	未報告
7	H8(1996)	福祉複合施設	2,535	住2,土3,P4,溝路1	9~10C,緑軸陶器出土	未報告
8	H9(1997)	高校校舎	192	住2,P2	9C	No.146
			278	住8,建1,土6,P77,溝1	7~9C,銅製巡方	
9	H10(1998)	高校校舎	290	住2,土23,P39,溝1	8~9C	No.146
10	H30(2018)	児童施設	253	住7,土5,P10,石列2	8~9C	本書



第2図 大輔原遺跡の過去の調査地（左は全体、右は点線内拡大）

## 第三章 調査成果

### 第1節 調査の概要

#### 1 調査区の設定

今回の開発予定地は約1,300㎡であるが、本調査に先立ち各所に試掘トレンチを設定して、建物等の攪乱で遺跡が破壊されている範囲を把握した。その結果、開発予定地の北側は建物等の攪乱による遺跡の破壊が確認されたことから、開発予定地の南側を調査対象範囲に設定した。

#### 2 調査の方法・手順

調査区はパワーショベルを用いて遺構検出が可能な深度まで表土を除去し、人力で遺構検出作業を進めた後、各遺構の掘り下げを行った。遺構番号は遺構の種類毎とし、竪穴住居址は大輔原遺跡第1次調査からの通し番号を付け、49号からとした。その他の遺構は今回の調査で1号から通し番号を付けた。遺構測量に係る基準は国家座標（世界測地系）を用いた。調査地周辺にある街区三角点、街区多角点を基に調査地内に基準点を複数設置し、これらを基に調査区内に3mのグリッドを設定した。測量基準点はX=27,897.000、Y=-46,314.000をNSO、EWOとした。測量は簡易遭り方測量により作成した。平面図・各遺構図・断面図は1/20で作成した。写真は発掘作業の各段階と遺構等の遺物出土状況及び完掘状況、調査区全景をフィルムカメラとデジタルカメラで撮影した。

#### 3 調査成果の概要

調査面積：253㎡

##### 発見遺構

竪穴住居址：7軒（奈良時代2軒、平安時代前期5軒）

土坑：5基

ピット：10基

石列：2本（近世）

##### 出土遺物

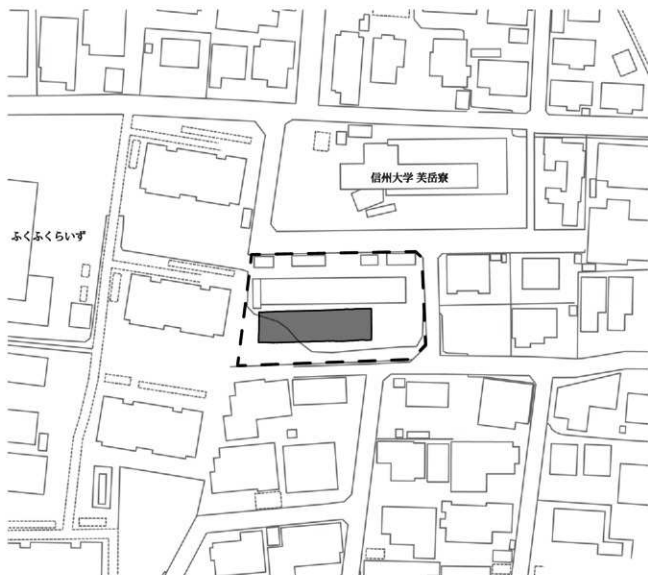
土器・陶磁器：土師器、黒色土器、須恵器、軟質須恵器、灰釉陶器、陶器、磁器

石器：石鏃、打製石斧、横刃形石器、凹石、砥石

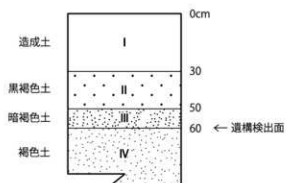
金属製品：鏃、刀子、釘

#### 4 標準土層（第4図）

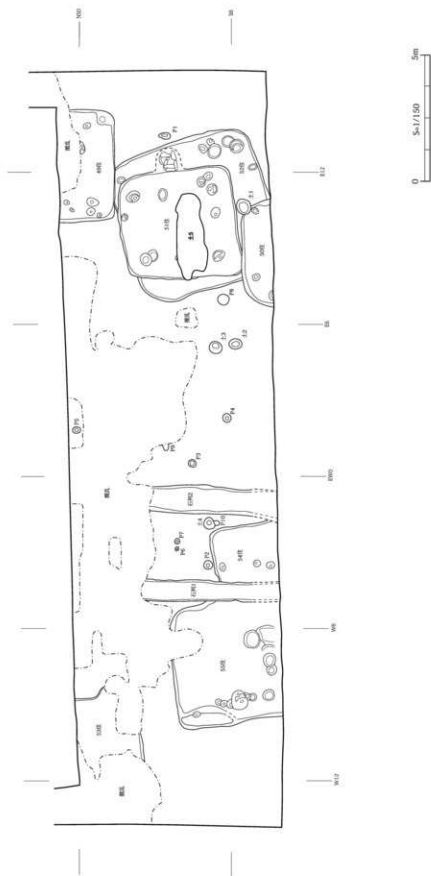
土層柱状図は攪乱の影響を受けていない南壁で作成、観察することとした。I層は造成のための砕石、II層は黒褐色のシルト質土、III層は暗褐色のシルト質土である。IV層は西側で礫の混入が見られる褐色のシルト質土で、遺物がほとんど含まれない、自然堆積層とみられる。検出面はIV層の上面に設定した。



第3図 事業対象地と調査区の範囲 (S=1/1,000)



第4図 調査地の標準土層図



第5図 調査区全体図 (S=1/150)

## 第2節 遺構

### 1 竪穴住居址（第3表、第6・7図、写真図版2・3）

竪穴住居址は7軒が検出された。内訳は奈良時代が2軒、平安時代前期が5軒である。竪穴住居址の平面形・規模・他遺構との新旧関係等については、一覧表を参照されたい。

#### (1) 第49号住居址

調査区の北東に位置する。北側は攪乱により喪失し、調査区外へ続く。カマドや火床面は確認できなかったが、東壁付近で焼土粒や炭化物が含まれる覆土が見られたことから、付近にカマドがあった可能性が推定される。床面は礫が混じるシルト質土で、明確な貼床や硬化面は見られない。床面にピットは8基確認され、P<sub>1</sub>は貯蔵穴状のピットと推定される。他のピットは浅く、用途は不明である。遺物は土師器の小型甕、黒色土器Aの杯A、須恵器の杯A・杯蓋などが出土している。時期は平安時代前期と推定される。

#### (2) 第50号住居址

調査区の南東に位置する。南側は調査区外へ続く。カマドや火床面は確認できなかった。東壁ではカマドの構築材になり得る形状をした礫が横たわった状態で確認されたが、被熱はなく、詳細は不明である。床面は礫が混じるシルト質土で、明確な貼床や硬化面は見られない。床面にピットは3基確認されたが、いずれも柱痕は確認できず、浅いことから、用途は不明である。遺物は黒色土器Aの杯A、須恵器の杯A、灰釉陶器片などが出土している。時期は平安時代前期と推定される。

#### (3) 第51号住居址

調査区の東側に位置する。中央は土5、南西はわずかに50住により喪失するが、床面が深いことから、概ね全面を調査することができた。カマドは東壁中央で袖石、天井石及び火床面が確認された。南側に散乱する礫は4層の上面で確認されたことから、本址の埋没過程にできた窪みに投げ込まれたものとみられる。床面は礫が混じるシルト質土で、明確な貼床や硬化面は見られない。床面にピットは12基確認されたが、床面深度がほぼ同一で切り合いが生じている52住のピットを一緒に捉えている可能性がある。P<sub>6</sub>・P<sub>9</sub>は浅いが、位置から、柱痕が見られるP<sub>1</sub>・P<sub>10</sub>と合わせて柱穴と推定される。遺物は土師器の甕・小型甕、須恵器の杯A・蓋もしくは盤・鉢などが出土している。時期は奈良時代と推定される。

#### (4) 第52号住居址

調査区の東側に位置する。北東と南西の一部は49・50住、中央の大半は51住により喪失する。カマドを構築する礫は確認できなかったものの、東側の覆土に焼土粒や炭化物が含まれ、東壁中央付近の床面、東壁中央で被熱土が見られることから、東壁中央にカマドがあったものと推定される。床面は、東側は礫がほとんど混じらないシルト質土、西側は礫が混じるシルト質土で、明確な貼床や硬化面は見られない。床面でピットは8基確認された。P<sub>6</sub>・P<sub>7</sub>は覆土に焼土塊と炭化物が含まれるが、用途は不明である。遺物は土師器の小型甕、須恵器の杯B・杯蓋などが出土している。時期は奈良時代と推定される。

#### (5) 第53号住居址

調査区の北西に位置する。南東と西側は攪乱により喪失し、北側は調査区外へ続くことから、全形を捉えることはできなかった。カマドを構築する礫は確認できなかったものの、東壁付近で炭化物や焼土塊が確認



されたこと、平面形態から、東壁にカマドがあった可能性が推定される。北側に散乱する礫は、覆土内で確認されており、埋設過程で投げ込まれたものとみられる。床面は礫が多量に含まれるシルト質土で、明確な貼床や硬化面は見られない。また、床面にピットは確認できなかった。遺物は土師器の甕・小型甕、黒色土器Aの杯Aもしくは碗、軟質須恵器の杯A、灰釉陶器の碗・皿などが出土している。時期は平安時代前期と推定される。

#### (6) 第54号住居址

調査区の中央西寄りに位置する。北西は55住、石列1により喪失し、南側は調査区外へ続くことから、全形を捉えることはできなかった。カマドや火床面は確認されていない。床面は礫が混じるシルト質土で、明確な貼床や硬化面は見られない。床面にピットは3基確認された。いずれも柱痕は確認できず、用途は不明である。遺物は須恵器の杯A・杯B・短頸壺などが出土している。時期は平安時代前期と推定される。

#### (7) 第55号住居址

調査地の南西に位置する。東側は石列1、北壁の一部は攪乱により喪失し、南側は調査区外へ続く。石列1を挟んでおり、54住との明確な切り合いは不明であるが、切り合いが生じていると推定される本址のカマド付近で、袖石が残存していることから、本址の方が新しいものと考えられる。カマドは東壁で被熱した袖石2石が確認された。硬い火床面は袖石2石の間で確認されたが、調査過程でその範囲の計測を失念した。また、カマドのすぐ南側には被熱した礫が見られるが、詳細は不明である。カマドの対面にあたる西壁北端にはテラス状の段が確認され、段上には平坦な礫が1石据えられている。これは出入口に関わる施設と推定される。床面は礫がほとんど混じらないシルト質土で、明確な貼床や硬化面は見られない。床面にピットは14基確認された。いずれも柱痕は確認できず、浅いことから、用途は不明である。遺物は土師器の甕・小型甕・方形土器、黒色土器Aの杯A・碗、須恵器の杯A・杯B・杯蓋・長頸壺・短頸壺・壺蓋などが出土している。土師器の方形土器はカマド周辺から出土していることから、カマドに関わる遺物の可能性も推測されるが、詳細は不明である。時期は平安時代前期と推定される。

### 2 土坑・ピット(第4・5表、第7図、写真図版4)

今回の調査では、検出段階で概ね直径50cm以上の穴は土坑、直径50cm未満の穴はピットとした。これらの平面形・規模・他遺構との新旧関係等については、一覧表を参照されたい。

土坑は5基、ピットは10基が検出された。平面形態は円形が12基、楕円形が2基、不整形が1基であり、方形は確認されていない。また、柱痕が確認されたものはない。遺物は土1・4・5、P2・3の5基で出土した。土4、P2・3は遺物が少量で破片も小さいため、時期の特定は困難である。土1も同様に遺物からの時期特定は困難であるが、50・52住との切り合いから、平安時代前期以降と推定される。土5は陶器の甕2点が並んで正位に据えられている。これは近世のトイレ遺構に類似するが、甕にはトイレ遺構特有の白色物質の付着が明確には認められないことから、詳細は不明である。

### 3 石列(第7図、写真図版4)

石列1 [規模] 546 × 86 × 44cm [床面積] 35.49㎡ [切り合い] 54・55住を切る

石列2 [規模] 512 × 112 × 12cm [床面積] 42.78㎡ [切り合い] 54住を切る

石列1・2は調査区の中央西寄りに位置する。様相が酷似することから、2本は一連のものとして推定される。石列1・2はともに南北に平行に延びる溝状遺構である。覆土には大量の礫が含まれ、15～20cm程度が

主体となるが、大きいもので 30cm 程度のもも見られる。また、小礫がほとんど認められないことから、礫同士に隙間が見られ、その隙間のすべてを土が埋めることもないため、締まりのない状態である。近世の布掘礎石建物に類似するが、上記の理由から、違うものと判断したい。遺物は須恵器の杯片のほかに、肥前産とされる磁器の染付蓋の破片、外面に灰釉が施された陶器の酒徳利の破片が出土していることから、近世と推定される。

第 3 表 竪穴住居一覧表

遺構No	平面形 主軸方向	カマド位置 カマド形態	長軸×短軸×深さ (cm)			本址より旧 本址より新	推定時期
			床面積 (㎡)				
49	隅丸方形？ N 88° - E	不明	478	<231>	18	52 住	平安時代前期
				<9.10>			
50	隅丸方形？	不明	426	<128>	21	51・52 住 上 1	平安時代前期
				<3.98>			
51	隅丸方形 N 86° - E	東壁中央 石組	462	438	36	52 住 50 住、上 5	奈良時代
		(東壁中央)		<19.13>			
52	隅丸方形 N 73° - E	不明	598	588	24	49・50・51 住、上 1・5	奈良時代
		(東壁)		<9.23>			
53	隅丸方形？ N 86° - E	不明	<278>	<254>	12		平安時代前期
		不明		<5.87>			
54	隅丸方形？	不明	<260>	<230>	16	55 住、石列 1・2	平安時代前期
				<5.52>			
55	隅丸方形？ N 80° - E	東壁 石組	<490>	<424>	50	54 住 石列 1	平安時代前期
				<17.94>			

測量数値

< > : 残存値

第 4 表 土坑一覧表

土坑No	平面形	規模 (cm)			新旧関係		出土遺物	備考
		長径	短径	深さ	本址より旧	本址より新		
1	円形	64	54	11	50・52 住		土師器片、須恵器杯 A	
2	円形	44	41	8				
3	円形	50	45	8				
4	円形	52	41	22	P10		土師器片	
5	不整形	348	114		51・52 住		陶器類、磁器蓋	近世か

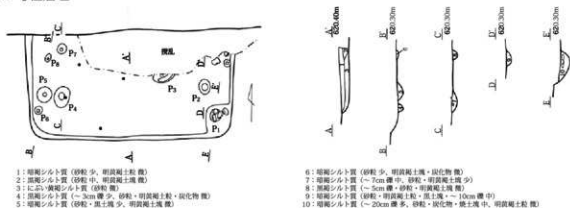
第 5 表 ビット一覧表

Pit No	平面形	規模 (cm)			新旧関係		出土遺物	備考
		長径	短径	深さ	本址より旧	本址より新		
1	楕円形	43	26	7				
2	円形	41	38	8			土師器片、須恵器杯	
3	円形	34	33	7			須恵器杯	
4	円形	35	35	9				
5	円形	36	30	8				
6	円形	21	20	6				
7	円形	23	23	6				
8	円形	(46)	(46)					未掘
9	楕円形	(32)	(20)					未掘
10	円形	(21)	(23)			上 4		未掘

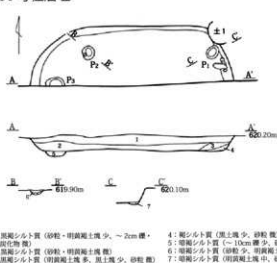
測量数値

( ): 推定値

### 第 49 号住居址



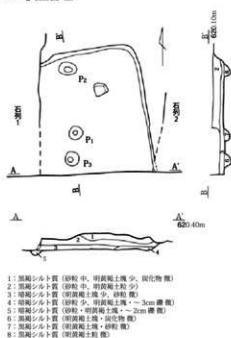
### 第 50 号住居址



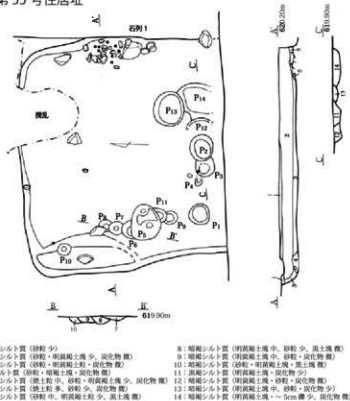
### 第 53 号住居址



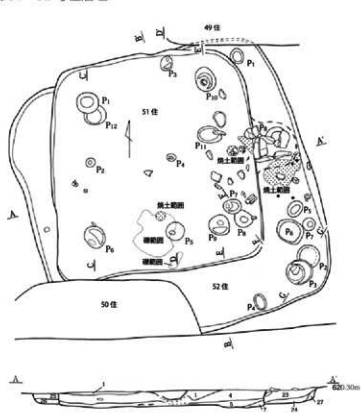
### 第 54 号住居址



### 第 55 号住居址



第 6 図 竪穴住居址(1)

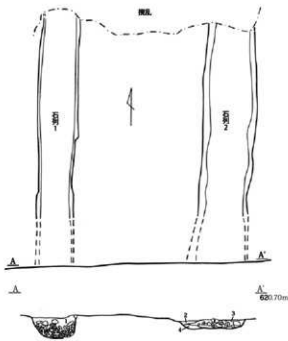


- 1: 堀形シルト質 (黄褐色土塊) <土5>
- 2: 堀形シルト質 (砂粒中, 明炭層土塊)
- 3: 堀形シルト質 (砂粒少, 明炭層土塊)
- 4: 堀形シルト質 (~10cm 厚) (砂粒・明炭層土塊少, 炭化物)
- 5: 堀形シルト質 (明炭層土塊少, 砂粒 ~ 3cm 厚)
- 6: 堀形シルト質 (明炭層土塊中, 砂粒)
- 7: 堀形シルト質 (黄土層中, 砂粒少, 炭化物)

- 8: 堀形シルト質 (明炭層土塊多, 砂粒中, 黄土塊少)
- 9: 堀形シルト質 (明炭層土塊中, 砂粒少, ~10cm 厚)
- 10: 堀形シルト質 (~10cm 厚少, 砂粒)
- 11: 堀形シルト質 (砂粒中, 明炭層土塊少, 黄土塊)
- 12: 堀形シルト質 (砂粒中, 明炭層土塊中)
- 13: 堀形シルト質 (明炭層土塊少, 砂粒・黄土塊)
- 14: 堀形シルト質 (砂粒少, 明炭層土塊・炭化物)

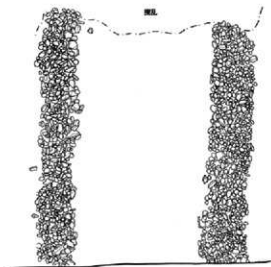
- 15: 堀形シルト質 (砂粒・明炭層土塊, ~5cm 厚)
- 16: 堀形シルト質 (砂粒少, 明炭層土塊, 黄土塊)
- 17: 堀形シルト質 (砂粒・明炭層土塊少, ~3cm 厚)
- 18: 堀形シルト質 (砂粒少, 明炭層土塊)
- 19: 堀形シルト質 (砂粒, 明炭層土塊少)
- 20: 堀形シルト質 (砂粒少, 明炭層土塊)
- 21: 堀形シルト質 (砂粒・明炭層土塊, ~8cm 厚少)
- 22: 堀形シルト質 (砂粒・明炭層土塊少, 黄土塊)
- 23: 堀形シルト質 (砂粒少, 明炭層土塊・黄土塊・炭化物)
- 24: 堀形シルト質 (砂粒・明炭層土塊・黄土塊少, 炭化物)
- 25: 堀形シルト質 (砂粒・明炭層土塊・黄土塊, ~5cm 厚)
- 26: 堀形シルト質 (砂粒, ~5cm 厚・明炭層土塊・黄土塊)
- 27: 堀形シルト質 (砂粒・明炭層土塊少, 黄土塊)
- 28: 堀形シルト質 (明炭層土塊・砂粒少, 黄土塊)
- 29: 堀形シルト質 (砂粒少, 黄土塊・明炭層土塊)
- 30: 堀形シルト質 (明炭層土塊中, 砂粒少)

石列 1・2

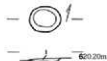


- 1: 堀形シルト質 (~30cm 厚多, 砂粒中, 明炭層土塊少)
- 2: 堀形シルト質 (砂粒・明炭層土塊少, 黄土塊・炭化物)
- 3: 堀形シルト質 (~30cm 厚多, 砂粒・炭粒中)
- 4: 堀形シルト質 (~20cm 厚多, 砂粒少, 明炭層土塊)

石列 1・2 礫出土状況



土 1



- 1: 堀形シルト質 (砂粒)

0 S=1/80 2m

第 7 図 竪穴住居址(2)、土坑、石列

## 第3節 遺物

### 1 土器・陶磁器（第6表、第8～11図、写真図版4～8）

奈良・平安時代の土器を中心に出土している。遺物の大半は竪穴住居内からの出土であり、遺構外の出土は少ない。実測可能なものや特徴的なものを極力図化し、計122点を掲載した。土器群の時期は概ね2・3期～7・8期の範疇で捉えられる。以下、出土した土器の器種・器形について触れたのち、土器群ごとに概観と詳細を述べていく。なお、土器の種別・器種・時期区分などは文末に記した文献に準じるものとする。

#### (1) 奈良・平安時代

##### ア 器種・器形

**土師器** 食膳具の出土はない。煮炊具は甕B・甕C・小型甕・小型甕A・小型甕B・小型甕C・小型甕D・方形土器がある。完形はわずしか見られず、調整は磨滅により不明瞭なものが多い。小型甕がほとんどの住居址から出土することに比べ、甕は53・55住である程度出土するのみで、他住居からの出土は小片にすぎない。

**黒色土器A** 食膳具に杯A・碗が見られる。外面はロクロ調整、内面は放射状・口縁横方向のミガキの後黒色処理を行ったものが大半である。杯Aは底部調整に静止ケズリと回転糸切りが確認できる。2法量とも存在するが小形品が大半を占める。また、黒色土器Bの出土は見られない。

**須恵器** 最も出土量が多い。食膳具は杯A・杯B・杯蓋B、貯蔵具は壺・長頸壺A・長頸壺C・短頸壺・短頸壺B・壺蓋A・鉢A・鉢Cが見られるほか、甕が出土している。杯Aは内外面はロクロ調整、底部は回転ヘラ切り・静止ケズリ・回転ヘラケズリ・回転糸切りなど、時期により多様な調整が確認できる。杯Bは底部に回転ヘラケズリを施すものが主体である。杯蓋Bは確認できるものはすべて回転ヘラケズリを施している。貯蔵具については残存状況が悪く、器種を細別しかねるものが多い。長頸壺・短頸壺は大形品と比べ小形品の出土が多い。胎土・焼成の状況については、緻密で青灰色・暗灰色を呈する焼成良好なもの、在地産とみられる胎土が粗く焼成不良のものが存在する。また、緻密で白色を呈する美濃須衛産と推定されるものもわずかに出土している。

**軟質須恵器** 杯Aがごく少量見られる。内外面ともロクロ調整である。

**灰釉陶器** 食膳具に碗、皿が少量見られる。外面の調整はロクロ調整・回転ヘラケズリを施したものが見られる。貯蔵具は壺が1点のみ出土しているが遺構に伴うものではない。

##### イ 土器群

#### 第49号住居址出土土器群（1～10）

10点を図示している。食膳具は黒色土器Aの杯A、須恵器の杯A・杯蓋B、煮炊具は土師器の甕・小型甕B・小型甕C・小型甕Dが出土している。貯蔵具の出土は見られない。杯Aの底部調整は須恵器・黒色土器Aともに回転糸切りである。黒色土器Aの杯Aは2法量に分かれる。内面のミガキは磨滅により不明瞭であるが、放射状・口縁横方向に施しているようである。2は内外面にタールや煤が付着しており、灯明具としての使用が想定される。8は武蔵甕である。器壁は薄く、口縁部はコの字状で緩やかに屈曲する。全体が縦に長い形状をとることから底部に台が付くものと推定される。9・10は小型甕Dで、大小に分かれている。これらの土器群は食膳具の形状や煮炊具の器種構成からみて、5・6期（平安時代前期前半）に相当する時期と推定される。

#### 第50号住居址出土土器群(11・12)

2点を図示している。出土量は少なく、食膳具のみの出土で黒色土器Aの杯A、須恵器の杯Aのほか、灰釉陶器編年における光ヶ丘1号窯式期の灰釉陶器の食膳具、軟質須恵器の杯Aの細片が出土している。11の黒色土器Aの杯Aは大形形で、ロクロ目を強く残し口縁端部は反外する。12の須恵器の杯Aは底部外面に「浄」の墨書が認められる。出土量が少ないため詳細は不明であるが、器種構成からみて7・8期(平安時代前期後半)に相当する時期と推定される。

#### 第51号住居址出土土器群(13～26)

14点を図示している。食膳具は須恵器の杯A・蓋もしくは盤、煮炊具は土師器の甕C・小型甕A・小型甕B・小型甕Cが見られるほか、甕Bの小片がわずかに見られる。貯蔵具は須恵器の鉢A・鉢Cのほか、細別できない須恵器の甕の小片が出土している。13～18は須恵器の杯Aである。底部調整法は多岐にわたり、13は不定方向の静止ケズリ、14は回転系切り、16は回転ヘラ切りのち不定方向の静止ケズリ、17は回転ヘラ切りのちナデが見られる。18は切り離し後に板状工具の圧痕が見られる。15～18の胎土はいずれも粗く、焼成不良により白灰から橙褐色を呈する。また、13・14・17には種実やモミ殻状の圧痕が確認できる。21は肩部がやや張る古手の小型甕Aとみられる。20・22は小型甕Bである。20はやや厚手で内外面にハケ目を施すのに対し、22は薄手で外面にのみハケ目が見られる。23の甕Cの器壁は非常に薄く、外面と底部に手持ちヘラケズリを施す。24・25は小形の鉢Aと考えられる。ロクロ調整であるが輪積み痕が残り、胎土は粗く焼成不良である。26はいわゆる播鉢の鉢Cである。胎土は緻密で焼成は良好であるが、内面にはわずかに輪積み痕が認められる。これらの土器群は食膳具の形態に若干の時期差がみられるものの、概ね2・3期(奈良時代)の範疇に収まると推定される。

#### 第52号住居址出土土器群(27～39)

13点を図示している。他住居に比べ煮炊具の割合が高く、52住出土土器の全体の4分の3を占める。食膳具は須恵器の杯B・杯蓋B、煮炊具は土師器の小型甕A・小型甕B・小型甕Cが出土しており甕は見られない。27・28は須恵器の杯Bである。27は底部に回転系切りを施すもので、混入品の可能性が高い。28は灰白色を呈する美濃須衛産とみられるもので、大きく反り上がる底部に回転ヘラ切りの後、ケズリ出して高台状の部分成形している。33～36の小型甕は厚手で口縁部の形態は様々である。内外面は剝離・磨滅が激しく調整が不明瞭であるが、ナデまたは工具ナデが見られるため小型甕Aと細別したい。30～32・37は小型甕Bである。32は厚手で、底部に工具による静止ケズリの後ナデが施される。37は内面にハケ目を持ち、底部には木葉痕が認められる。38・39は寸胴な形態を呈するが、外面と底部に手持ちヘラケズリを施すため小型甕Cとしたい。これらの土器群は煮炊具の器種構成からみて、2・3期(奈良時代)に相当するものと推定される。

#### 第53号住居址出土土器群(40～50)

11点を図示している。食膳具は黒色土器Aの杯A・椀、軟質須恵器の杯A、灰釉陶器の碗・皿、煮炊具は土師器の甕B・小型甕が出土している。40・41は黒色土器Aの食膳具であるが、底部が欠損しているため杯Aまたは椀としている。44～47は灰釉陶器で、口縁端部の形状から光ヶ丘1号窯式期とみられる一群である。44の碗は体部下半に回転ヘラケズリを施しハケ塗りの施釉を行っている。高台は三日月状を呈する。50の甕Bは体部の途中までロクロ調整を行っている。48の小型甕は、厚手でロクロによる成形を行っている。外面にカキ目は認められず、底部付近を手持ちヘラケズリで調整している。灰釉陶器の窯式や軟質須恵器が見られる点などから、これらの土器群の時期は7・8期(平安時代前期後半)に相当するものと推定される。

#### 第54号住居址出土土器群 (51～56)

6点を図示している。食膳具は須恵器の杯A・杯Bのほか、黒色土器Aの小片がわずかに見られる。煮炊具は土師器の甕がわずかに見られるにとどまる。貯蔵具は須恵器の短頸壺B、他に須恵器の甕・瓶の小片が出土している。51～54は須恵器の杯Aである。口径は13cm前後で、底部調整はすべて回転系切りである。53は内外面に火禿痕が見られる。55の杯Bは残存部が少ないため詳細は不明であるが、4法量のうちⅡ類に分類できると考えられる。56は短頸壺Bと推定される。径は小さく体部下半に回転ヘラケズリを施している。須恵器杯Aの形態などからみて、これらの土器群の時期は概ね6期(平安時代前期前半)に相当するものと推定される。

#### 第55号住居址出土土器群 (57～113)

57点を図示している。出土状況の良い土器群であり、カマドの周辺からある程度まとまった出土が見られた。食膳具は黒色土器Aの杯A・碗、須恵器の杯A・杯B・杯蓋B、煮炊具は土師器の甕B・小型甕・小型甕B・小型甕D、貯蔵具は須恵器の壺・長頸壺C・短頸壺・短頸壺B・壺蓋Aが見られる。また、特殊な遺物として土師器の方形土器が出土している。57～64、66～69は黒色土器Aの杯Aであり、69が大形品とみられるほかはすべて小形品である。57・60～64は内面に縦方向と口縁部横方向の丁寧なミガキ、底部調整に静止ケズリが施される。58・59は放射状のミガキ、回転系切りが施されるものである。65は底部から体部下半にかけて丸く立ち上がるため、銅鏡模倣の碗である可能性が考えられる。70～78は須恵器の杯Aである。底部調整は75に回転系切りのち回転ヘラケズリ、78に回転系切りのち工具によるナデ調整の痕跡が認められるほかはすべて回転系切りである。70・71・73・74・77は体部の傾斜が大きくロクロ目が強い、時期が若干下るものである。また、70・74・77には火禿痕が認められる。79～84は須恵器の杯Bであり、暗灰色を呈する堅緻なものが多い。法量については83がⅣ類、84がⅢ類の深型である。79～82は残存状況が悪く細別し兼ねるが、底径が9.4～10.7cmに取まるためⅢ・Ⅳ類のどちらかであろう。82は底部の切り離し作業を行い、静止ケズリを施したのちに爪状圧痕が見られる。85～90の杯蓋Bはすべてに2・3単位の回転ヘラケズリが施されている。86のつまみ部の剥離面には回転系切り痕が確認できる。法量は口径が13・14cm前後の小形品と17cm前後の大形品に分けられるが細別は難しい。98の小型甕は厚手で内外面に工具ナデが見られる。99・100・102～104は小型甕Dであるが、99・100・104にカキ目は認められない。105は長頸壺Cである。円筒状の体部の底に粘土を詰めた後、底部外面にも粘土を張り付けて補強している。107は無台の短頸壺と推定される。109は壺蓋Aとみられ、大形の短頸壺とセットをなすものと考えられる。胎土の質から美濃須産と推定される。110～113は方形土器と称しているもので、長辺が緩やかに膨らむ長方形を呈する筒状の土器である。楕円形に輪積みを行い成形したのち四隅に粘土を張り付け、外面にハケ調整を行いつつ角を調整しているとみられる。内面は輪積み痕が明瞭に残る粗雑な調整である。ハケ状工具などで横方向にナデたのち、縦方向に粗い指ナデを施している。端部は外面に静止ケズリを施し、接地面は平らに仕上げている。また、輪積みの天地が逆であることから、倒立した状態で成形されていた可能性が考えられる。外面や断面には暗褐色を呈する何らかの付着物が見られる。方形土器は円筒土器の類似品と推定されるが、類例が少なく詳細は不明である。これらの土器群は器種構成や食膳具の様相からみて、5・6期(平安時代前期前半)に相当する時期と推定される。

#### その他の土器 (117～122)

117は検出面出土の灰軸陶器の壺である。詳細は不明であるが、底部は回転系切りを施したのちナデ調整を施して仕上げている。118～122は試掘トレンチ出土である。119～122は須恵器であり、119の杯Aは器面に火禿痕、底部にヘラ記号が見られる。見込みには漆のような黒色の付着物が確認できる。120は杯BのⅢ類とみられる。121・122は壺の底部で、ともに底部調整は回転系切りであるが体部下半に回転

ヘラケズリを施す。122は小形の長頸壺Aと考えられる。これらは遺構に伴うものではないが、概ね5～8期(平安時代前期)の粹に取まり、堅穴住居址の存続時期とは相反しない。

## (2) 近世(114～116)

3点を図示しており、すべて土5から出土している。114・115は甕の下半部である。114の体部が直線的に開くのに対し、115は内湾する形状である。これらは内面は輪積み痕を明瞭に残すが、指頭圧痕で成形したのち横方向の工具ナデを施している。外面は底部に強めの指ナデを施し、銚軸を刷毛で施軸している。116は肥前産の染付陶器で、114の内部から出土した。内外面に透明釉を施し、受け部は露胎である。体部に透かし孔を持つことから香炉の蓋と考えられる。

### 参考文献

恵那市教育委員会 1983『正家一号窯発掘調査報告書』

08長野県埋蔵文化財センター 1990『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書4—松本市内その1—総論編』

第6表 土器・陶磁器観察表

図 No.	遺構	種類	器 形	法量 (cm)			残存度		成形・調剤等	備考
				口径	底径	器高	口縁	底部		
1	49住	黒色土器A	杯A	16.6	7.8	4.2	わずか	1/2	ロケロ、口縁ヨコ。内ミガキ→黒色処理、底回転糸切り	
2	49住	黒色土器A	杯A	13.7	6.2	3.3	完	完	ロケロ、口縁ヨコ。内ミガキ→黒色処理、底回転糸切り	タール。外壁
3	49住	黒色土器A	杯A	(13.4)	6.4	3.6	1/4	2/3	ロケロ、口縁ヨコ。内ミガキ→黒色処理、底回転糸切り	
4	49住	須恵器	杯A	(13.0)	(6.4)	4.0	わずか	1/4	ロケロ、口縁ヨコ。底回転糸切り	
5	49住	須恵器	杯A			5.4		完	ロケロ、底回転糸切り	
6	49住	須恵器	杯蓋B	(12.0)				1/12	ロケロ、口縁ヨコ	
7	49住	土師器	小型携B	(18.2)				1/4	口縁ヨコ。内方キ、外ハケ、内工具ナデ	
8	49住	土師器	小型携C	(16.8)				1/12	口縁ヨコ。外・底静止ケズリ。内指頭圧痕→ナデ	
9	49住	土師器	小型携D	(9.8)					ロケロ、口縁ヨコ。方キ、内工具ナデ	
10	49住	土師器	小型携D	(12.8)				1/4	ロケロ、口縁ヨコ。方キ	
11	50住	黒色土器A	杯A	16.2	6.8	4.9	1/2	完	ロケロ、口縁ヨコ。内ミガキ→黒色処理、底回転糸切り	外壁
12	50住	須恵器	杯A		5.8			完	ロケロ、底回転糸切り	底部非常「浄」
13	51住	須恵器	杯A		7.8			2/3	ロケロ、底静止ケズリ	種別状況
14	51住	須恵器	杯A		7.6			1/2	ロケロ、底回転糸切り	種別状況
15	51住	須恵器	杯A	13.4	7.9	4.05	完	完	ロケロ、口縁ヨコ	
16	51住	須恵器	杯A	15.8	9.7	4.4	3/4	完	ロケロ、口縁ヨコ。底回転ヘラ切り→静止ケズリ	
17	51住	須恵器	杯A	15.0	6.9	4.2	4/5	完	ロケロ、口縁ヨコ。底回転ヘラ切り→ナデ	毛三坑土皿
18	51住	須恵器	杯A	13.4	6.6	4.5	1/2	2/3	ロケロ、口縁ヨコ	底板状況
19	51住	須恵器	蓋or 暫	(24.6)				1/8	ロケロ、口縁ヨコ。外回転ヘラケズリ	
20	51住	土師器	小型携B			10.0		完	ハケ。底ハケ→ナデ	
21	51住	土師器	小型携A	12.2	8.0	11.85	3/4	完	口縁ヨコ。外ナデ。内工具ナデ。内指頭圧痕	外付着物
22	51住	土師器	小型携B	(13.0)				3/8	口縁ヨコ。外ハケ。内ナデ	
23	51住	土師器	携C		6.2			4/5	内工具ナデ。外静止ケズリ	内付着物
24	51住	須恵器	鉢A	(20.2)				1/5	ロケロ、口縁ヨコ	
25	51住	須恵器	鉢A						ロケロ、口縁ヨコ	
26	51住	須恵器	鉢C	(19.4)					ロケロ、口縁ヨコ	
27	52住	須恵器	杯B			6.6		1/8	ロケロ、底回転糸切り	
28	52住	須恵器	杯B			(11.4)		1/4	ロケロ。外回転ヘラケズリ。ケズリ出し高台?	美濃須産
29	52住	須恵器	杯蓋B						ロケロ。外回転ヘラケズリ	
30	52住	土師器	小型携B	(17.4)				わずか	口縁ヨコ。外ハケ。内工具ナデ	
31	52住	土師器	小型携B	(16.6)				1/8	口縁ヨコ。外ハケ。内工具ナデ	
32	52住	土師器	小型携B		8.0			完	外ハケ。内工具ナデ。底ケズリ→ナデ?	
33	52住	土師器	小型携A	(11.2)				1/8	口縁ヨコ。内工具ナデ・指頭圧痕	内壁
34	52住	土師器	小型携A	(12.6)				1/8	口縁ヨコ。工具ナデ	
35	52住	土師器	小型携A	(13.6)				1/8	口縁ヨコ	
36	52住	土師器	小型携A	(12.8)				1/8	口縁ヨコ。ナデ	
37	52住	土師器	小型携B		6.8			3/4	ナデ。内ハケ	壁。底木炭痕
38	52住	土師器	小型携C		6.0			完	ナデ。外ハケ・静止ケズリ。底静止ケズリ	
39	52住	土師器	小型携C		8.0			1/4	ナデ。内工具ナデ。外・底静止ケズリ	
40	53住	黒色土器A	杯A or 碗	(14.1)				わずか	口縁ヨコ。内ミガキ→黒色処理	
41	53住	黒色土器A	杯A or 碗	(14.7)				1/4	ロケロ。口縁ヨコ。内ミガキ→黒色処理	
42	53住	黒色土器A	碗		(6.8)			1/2	ロケロ。内ミガキ→黒色処理、底回転糸切り	
43	53住	灰釉須恵器	杯A	(15.8)				1/8	ロケロ、口縁ヨコ	
44	53住	灰釉須恵器	碗		(7.3)			3/8	ロケロ。外指頭ヘラケズリ。胎輪(ハケ塗り)	内面輪積み痕
45	53住	灰釉須恵器	碗	(14.0)				わずか	ロケロ、口縁ヨコ。胎輪	
46	53住	灰釉須恵器	碗	(19.0)				わずか	ロケロ、口縁ヨコ。胎輪	
47	53住	灰釉陶器	皿	(16.0)				1/8	ロケロ、口縁ヨコ。外回転ヘラケズリ。胎輪	
48	53住	土師器	小型携		8.25			完	ロケロ。外静止ケズリ。底回転糸切り	壁

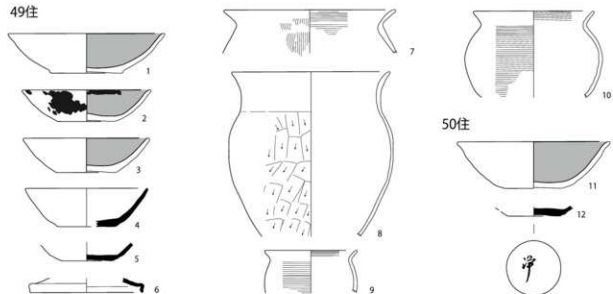


順 No.	機種	種別	部 器 器 形	法盤 (cm)			乳存度		成形・調節等	備考
				口径	底径	器高	口径	底径		
49	53 住	土鍋器	費 B	(25.4)			3/16		ナデ、外ハケ	
50	53 住	土鍋器	費 B	(21.0)			1/8		ロケロ、口樋ヨコ、外ハケ、内カキ	内保
51	54 住	須器器	杯 A		(7.0)			3/8	ロケロ、底回転糸切り	
52	54 住	須器器	杯 A	(13.6)			3/16		ロケロ、口樋ヨコ	
53	54 住	須器器	杯 A	(13.0)	(7.8)	3.65	1/8	3/8	ロケロ、口樋ヨコ、底回転糸切り	火障箱
54	54 住	須器器	杯 A	13.1	6.6	3.6	1/2	7/8	ロケロ、口樋ヨコ、底回転糸切り	
55	54 住	須器器	杯 B	(16.3)	(10.5)	3.95	わずか	わずか	ロケロ、口樋ヨコ、内工具ナデ	
56	54 住	須器器	知照書 B						ロケロ、外回転ヘラケズリ	
57	55 住	黒色土鍋 A	杯 A		6.0		1/3		ロケロ、内ミガキ→黒色処理、底静止ケズリ	
58	55 住	黒色土鍋 A	杯 A		6.4		7/8		ロケロ、内ミガキ→黒色処理、底回転糸切り	
59	55 住	黒色土鍋 A	杯 A		6.6		5/8		ロケロ、内ミガキ→黒色処理、底回転糸切り	
60	55 住	黒色土鍋 A	杯 A		6.6		5/8		ロケロ、内ミガキ→黒色処理、底静止ケズリ	
61	55 住	黒色土鍋 A	杯 A		7.2		5/8		ロケロ、内ミガキ→黒色処理、底静止ケズリ	
62	55 住	黒色土鍋 A	杯 A		6.0		1/3		ロケロ、内ミガキ→黒色処理、底静止ケズリ→ナデ	
63	55 住	黒色土鍋 A	杯 A		7.0		1/8		ロケロ、内ミガキ→黒色処理、底静止ケズリ	
64	55 住	黒色土鍋 A	杯 A		5.6		1/8		ロケロ、内ミガキ→黒色処理、底静止ケズリ	
65	55 住	黒色土鍋 A	楯		9.6		1/4		ロケロ、内ミガキ→黒色処理、底静止ケズリ	
66	55 住	黒色土鍋 A	杯 A	(12.4)			1/8		ロケロ、口樋ヨコ、内ミガキ→黒色処理	
67	55 住	黒色土鍋 A	杯 A	(12.4)			1/8		ロケロ、口樋ヨコ、内ミガキ→黒色処理	
68	55 住	黒色土鍋 A	杯 A	(14.4)			1/8		ロケロ、口樋ヨコ、内ミガキ→黒色処理	
69	55 住	黒色土鍋 A	杯 A	(17.8)			1/10		ロケロ、口樋ヨコ、内ミガキ→黒色処理	
70	55 住	須器器	杯 A	(12.4)	6.0	3.3	1/8	わずか	ロケロ、口樋ヨコ、底回転糸切り	火障箱
71	55 住	須器器	杯 A	(12.8)	6.6	4.0	3/8	1/2	ロケロ、口樋ヨコ、底回転糸切り	
72	55 住	須器器	杯 A	(13.8)	7.6	4.4	1/5	1/4	ロケロ、口樋ヨコ、底回転糸切り	
73	55 住	須器器	杯 A	13.8	6.8	3.95	1/2	9/10	ロケロ、口樋ヨコ、底回転糸切り	内保
74	55 住	須器器	杯 A	(13.0)	5.8	3.5	1/5	1/2	ロケロ、口樋ヨコ、底回転糸切り	火障箱
75	55 住	須器器	杯 A	(12.6)	8.0	3.8	わずか	2/3	ロケロ、口樋ヨコ、底回転糸切り→回転ヘラケズリ	
76	55 住	須器器	杯 A	(11.8)	6.6	4.0	1/8	1/4	ロケロ、口樋ヨコ、底回転糸切り	
77	55 住	須器器	杯 A		5.6		1/2		ロケロ、口樋ヨコ、底回転糸切り	火障箱
78	55 住	須器器	杯 A		6.6		完		ロケロ、底回転糸切り→内工具ナデ	
79	55 住	須器器	杯 B		9.4		完		ロケロ、外回転ヘラケズリ	
80	55 住	須器器	杯 B		(10.6)		1/16		ロケロ、外回転ヘラケズリ	
81	55 住	須器器	杯 B		9.8		1/2		ロケロ、外回転ヘラケズリ	
82	55 住	須器器	杯 B		10.7		1/2		ロケロ、外回転ヘラケズリ→静止ケズリ	底爪状内保
83	55 住	須器器	杯 B	(11.4)	6.8	4.2	3/8	1/4	ロケロ、口樋ヨコ、外回転ヘラケズリ	火障箱
84	55 住	須器器	杯 B	(14.4)			1/10		ロケロ、口樋ヨコ	
85	55 住	須器器	杯蓋 B	14.2		3.45	3/4		ロケロ、口樋ヨコ、外回転ヘラケズリ	
86	55 住	須器器	杯蓋 B	(13.6)			3/8		ロケロ、口樋ヨコ、外回転糸切り→回転ヘラケズリ	
87	55 住	須器器	杯蓋 B	14.4			1/2		ロケロ、口樋ヨコ、外回転ヘラケズリ	
88	55 住	須器器	杯蓋 B	(17.0)			1/5		ロケロ、口樋ヨコ、外回転ヘラケズリ	
89	55 住	須器器	杯蓋 B	(14.0)			1/8		ロケロ、口樋ヨコ、外回転ヘラケズリ	
90	55 住	須器器	杯蓋 B						ロケロ、口樋ヨコ、外回転ヘラケズリ	
91	55 住	土鍋器	費 B	(21.2)			1/4		口樋ヨコ、外ハケ、内工具ナデ	
92	55 住	土鍋器	費 B	(21.2)			1/4		口樋ヨコ、外ハケ、内工具ナデ	
93	55 住	土鍋器	費 B	(21.2)			3/10		口樋ヨコ、外ハケ、内工具ナデ	
94	55 住	土鍋器	費 B	22.0			1/2		口樋ヨコ、外ハケ、内カキ→ハケ、内蓋ナデ	
95	55 住	土鍋器	費 B	(23.2)			1/5		口樋ヨコ、外ハケ、内工具ナデ→カキ、内蓋ナデ	
96	55 住	土鍋器	費 B		8.4			1/2	外ハケ、内ナデ、底ヘラ切り→ナデ	
97	55 住	土鍋器	費 B		(7.6)			1/8	外ハケ、内工具ナデ→ナデ、底工具ナデ	内保
98	55 住	土鍋器	小型機	(13.2)			1/4		口樋ヨコ、内工具ナデ	
99	55 住	土鍋器	小型機 D	(14.2)			1/5		ロケロ、口樋ヨコ	
100	55 住	土鍋器	小型機 D		6.0		2/3		ロケロ、底回転糸切り	
101	55 住	土鍋器	小型機 B	(16.6)			1/8		口樋ヨコ、外ハケ、内工具ナデ	
102	55 住	土鍋器	小型機 D		4.6		3/4		ロケロ、外カキ、底回転糸切り	内保
103	55 住	土鍋器	小型機 D		(4.6)		わずか		ロケロ、外カキ、底回転糸切り	
104	55 住	土鍋器	小型機 D	(13.4)			1/6		ロケロ、口樋ヨコ	
105	55 住	須器器	長照書 C		4.8		完		ロケロ、底粘土張り付け	
106	55 住	須器器	知照書 B	(7.8)			1/4		ロケロ	
107	55 住	須器器	知照書		8.0		完		ロケロ、底回転糸切り	
108	55 住	須器器	壺		(13.4)		1/4		ロケロ	
109	55 住	須器器	壺蓋 A						ロケロ	美濃瀬産産
110	55 住	土鍋器	方形土鍋		14.8		1/2		輪組み、外ハケ、内ハケ→指ナデ	内保、付着物
111	55 住	土鍋器	方形土鍋				3/8		輪組み、外ハケ、内ハケ→指ナデ	保
112	55 住	土鍋器	方形土鍋				1/2		輪組み、外ハケ、内ハケ→指ナデ	
113	55 住	土鍋器	方形土鍋				1/2		輪組み、外ハケ、内ハケ→指ナデ	
114	土 5	陶器	壺		23.4		1/2		輪組み、内面洞玉蓋→ナデ、内工具ナデ、外急輪 (洞輪)	
115	土 5	陶器	壺		24.6		完		輪組み、内面洞玉蓋→ナデ、内工具ナデ、外急輪 (洞輪)	
116	土 5	磁器	香炉蓋	(12.5)			わずか		ロケロ、口樋ヨコ、外回転ヘラケズリ、急輪 (透明輪)	肥前産
117	焼出前	灰輪陶器	壺		(6.3)		3/8		ロケロ、外回転ヘラケズリ、底回転糸切り→ナデ、急輪	そま状内保
118	試製 1r	黒色土鍋 A	杯 A		(6.3)		3/8		ロケロ、内ミガキ→黒色処理、底回転糸切り	
119	試製 1r	須器器	杯 A	13.3	6.7	3.8	5/8	完	ロケロ、口樋ヨコ、底回転糸切り	内保、底ヘラ記号、火障箱
120	試製 1r	須器器	壺		10.2		1/2		ロケロ、外回転ヘラケズリ	
121	試製 1r	須器器	壺		14.6		1/2		ロケロ、外回転ヘラケズリ→ナデ、底回転糸切り	
122	試製 1r	須器器	長照書 A		4.6		1/2		ロケロ、外回転ヘラケズリ、底回転糸切り	

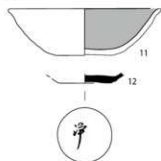
以下の調整・急輪については略称を用いている。なお、法盤の ( ) 内数値は還元した際の測定値を表す。

ロケロ：ロケロナデ ヨコ：ヨコナデ

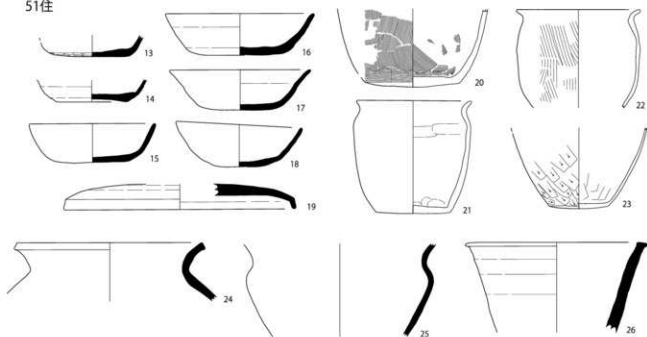
49住



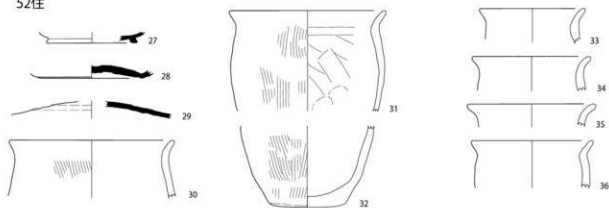
50住



51住

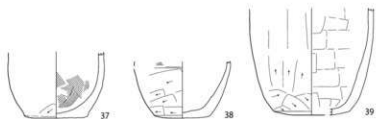


52住

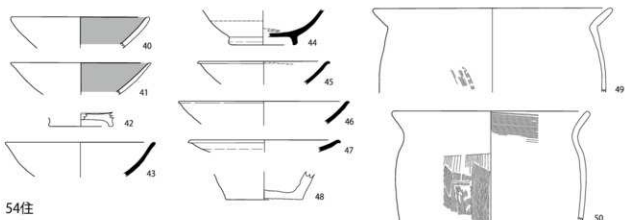


0 S=1/4 10cm

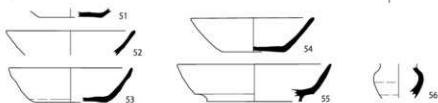
第8図 土器・陶磁器(1)



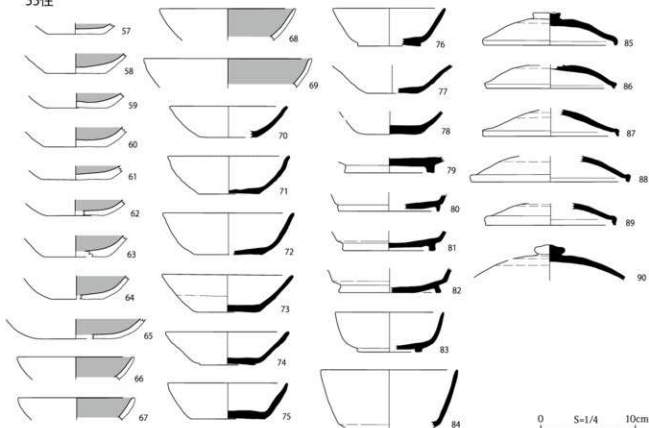
53住



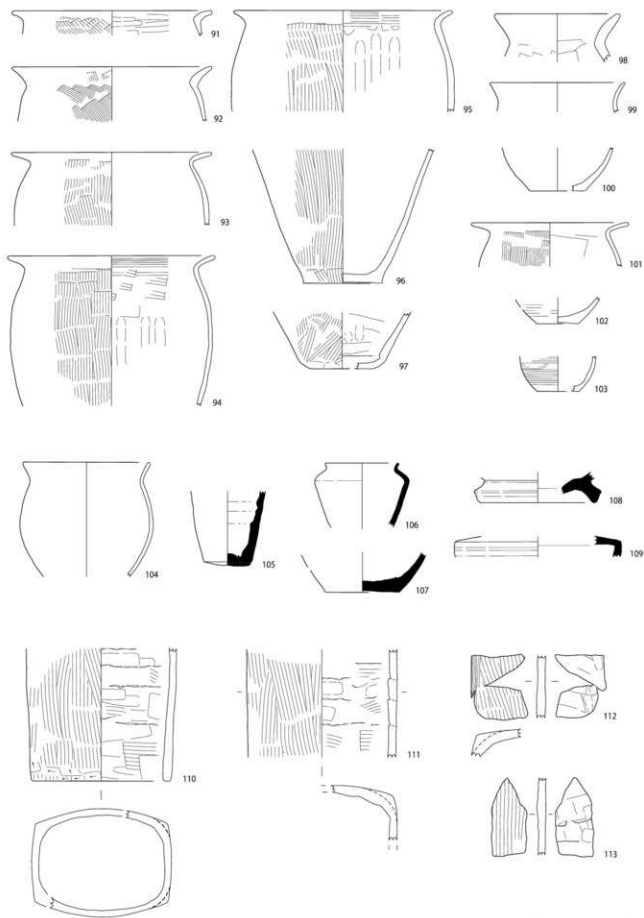
54住



55住



第9図 土器・陶磁器(2)

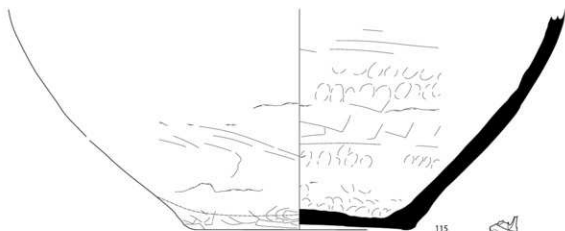


第10图 土器·陶磁器(3)

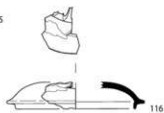
±5



114



115



116

検出面



117

試掘トレンチ



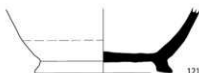
118



119



120



121



122

0 S=1/4 10cm

第11図 土器・陶磁器(4)

## 2 石器（第7表、第12図、写真版8）

今回の調査で、合計10点の石器が出土した。器種の内訳は、石鏃3点、打製石斧1点、横刃形石器2点、凹石1点、砥石1点、剥片2点がある。このうち遺存状態のよい定型石器を中心に4点を図示し、概要を述べる。それ以外のものは一覧表を参照されたい。石器の帰属時期は共伴する土器に準じるものと考えられる。

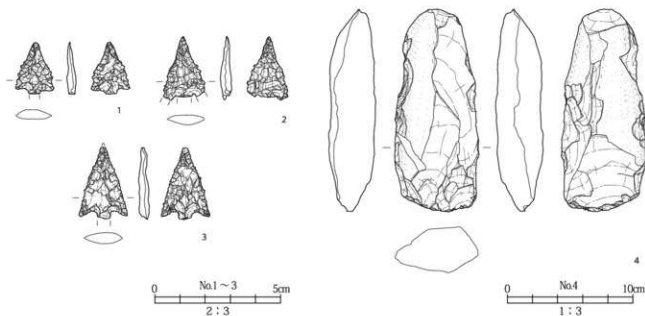
石鏃（1～3） 1は、有茎で、基部の挟りは浅いため、平基に分類される。側辺下部に鋸歯が認められる。茎部は欠損している。2・3は、有茎で、基部の挟りが深く、凹基である。2は、側辺がやや内曲しており、先端が鋭い。茎部と両逆刺は欠損している。3は、側辺に鋸歯が見られるが、形状はほぼ直線である。尖頭部と茎部が欠損している。1・2は縄文時代晩期に特有の形態である飛行機鏃の可能性がある。石材は1・3がチャートで、2は黒曜石である。

打製石斧（4） 4は、頁岩製の完形品である。平面形は、短冊形と楕形の間に近い形状を呈する。刃部は緩い円刃で、刃縁には磨滅痕が見られる。表裏面に大きく自然面が残っており、大形剥片ではなく、自然礫を素材にしている。

第7表 石器一覧表

順No.	ID	遺構	出土地点	器種	石材	長 (cm)	幅 (cm)	厚 (cm)	重量 (g)	破損状況	備考
1	49住	南内	剥片	チャート	2.43	2.18	0.49	2.4		完形	
2	55住	加27	横刃形石器	頁岩	(13.03)	(7.85)	(2.86)	(250.5)	1/4欠		横長剥片、両面加工、対数1、刃縁直刃、自然面あり
3	55住	カマド	砥石	砂岩	16.15	(28.50)	5.45	(3340.0)	1/4欠		平面形不定形、断面形長方形、砥面数1、線条研削痕あり
4	55住		剥片	黒曜石	2.18	1.19	0.38	0.8		完形	
1	5	55住	南内	石鏃	チャート	(1.97)	1.52	0.34	(0.8)	1/4欠(茎欠)	有茎、基部(挟り普通、逆刺鋭い)、側辺(鋸歯あり、外曲、最大幅下端)、飛行機鏃か
2	6	55住	南内	石鏃	黒曜石	(2.44)	(1.62)	0.41	(1.0)	1/4欠(茎と両逆刺欠)	有茎、基部(挟り深い)、側辺(鋸歯なし、内曲)、先端鋭い、飛行機鏃か
3	7	横出倉	南内	石鏃	チャート	(2.79)	1.90	0.44	(1.7)	1/4欠(尖頭部と茎欠)	有茎、基部(挟り深い、逆刺鋭い)、側辺(鋸歯あり、まっすぐ)
8	試掘w2			横刃形石器か	粘板岩	(4.00)	(3.04)	(0.42)	(6.8)	1/2欠	
9	試掘w2			凹石	砂岩	10.04	8.73	5.37	543.0	完形	平面形円形、断面形楕円形、砥部(表面1、円形、φ5.47cm、深さ2.55cm)
4	10	楓風	石列1北tr	打製石斧	頁岩	15.85	6.75	3.76	444.0	完形	円刃(緩い)、短冊形と楕形の間、刃縁に磨滅痕

※ ( ) 内数値は現存額を表す。  
※ 1.200g未満は0.1g単位、1.200g以上は5g単位。



第12図 石器

### 3 金属製品 (第8表、第13図、写真図版8)

#### (1) 概要

金属製品は鉄製品が7点出土している。その他、鉛滓が127.5g出土している。これらの出土地点・器種・寸法等については一覧表を参照されたい。

器種は鎌・刀子・釘・不明品である。その内、比較的残存状態の良いなもの、特徴的なもの3点を図示している。遺物の記載にあたっては図番号を使用しているが、実測図を掲載できなかったものについては一覧表の通番を用いて「ID 数字」で記載している。また、遺物の形状や構造については、X線撮影を行っていないため、目視による現状を記載している。

#### (2) 鉄製品

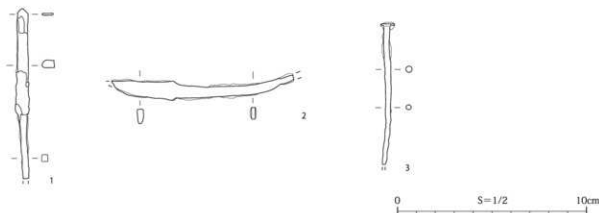
鎌(1) 破損や錆化により関の形状は不明だが、身部は広がらず細長く伸びる。切先は主頭状のようである。断面は茎部が正方形に近く、身部は長方形で切先に向かって厚みが減っていく。

刀子(2) 両関造りで身部が小さく、全体的に外湾する形状である。切先をわずかに欠いているが、まもなく収束するとみられる。

釘(3) 2点が出土し、1点を図示している。3は頭部が円形の皿状を呈する飾り釘であるが、断面が円形を呈するため後世のものである可能性が高い。ID 3は残存状況が悪く錆化も著しいが、頭部は先端を薄く叩き伸ばしているようにみられる。

第8表 金属製品一覧表

図No.	ID	遺構	出土地点	器種	最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)	金属種別	備考
1	1	51 住	No 1	鎌か	89.9	8.6	6.8	7.7	Fe	
	2	覆瓦		不明	94.1	6.2	5.3	6.4	Fe	棒状製品/断面方形
	3	覆瓦		釘か	33.9	6.3	3.6	1.3	Fe	釘の頭部か/断面不明瞭
3	4	53 住	南東	釘	75.2	8.0	7.6	4.4	Fe	
2	5	55 住	No 27	刀子	96.4	10.7	6.3	10.2	Fe	
	6	55 住	No 28	不明	37.7	6.2	6.0	3.4	Fe	棒状製品/断面方形
	7	55 住	南西	不明	10.2	5.7	5.7	0.6	Fe	棒状製品/断面方形
	8	55 住	北東(東ベルト)	滓	-	-	-	94.1		
	9	試掘 tr2		滓	-	-	-	33.4		



第13図 金属製品

## 第IV章 総括

今回の調査では、事業対象地の北半分で建物等の攪乱による遺跡の破壊を受けていたものの、南半分で奈良時代から平安時代前期（8世紀から9世紀）にかけての集落を明らかにするとともに、近世の遺構や遺物を得ることができた。以下に、時期ごとの様相を概観し、調査のまとめとしたい。

### 奈良時代以前（8世紀以前）

奈良時代以前の遺構は確認されていない。遺物についても、縄文時代晩期に時期をおくと推定される石鏃や打製石斧などが数点確認されるのみである。

### 奈良時代・平安時代前期（8・9世紀）

奈良時代の竪穴住居址は2軒、平安時代前期の竪穴住居址は5軒が確認された。さらに時期を細分すると、大きく3時期に区分される。本調査地に初めて竪穴住居址が出現するのは2・3期（奈良時代）で、調査区の東側で第51・52号住居址が確認された。第51号住居址は4本の柱穴を伴う竪穴住居址になる。カマドは、第51号住居址で東壁中央に石組カマド、第52号住居址で東壁中央に被熱土が確認されている。また、食膳具は須恵器が主体となる。5・6期（平安時代前期前半）になると、第49・54・55号住居址の3軒が確認される。第49・54号住居址は大半が調査区外へ続くことから全形を捉えられていない。第55号住居址は概ね調査ができており、石組カマドや出入口に関わるとされる施設を確認している。食膳具は須恵器に加えて黒色土器が出現するものの、須恵器が主体となることに変わりはない。また、第55号住居址からは土師器の方形土器が出土しているが、あまり類例の見られないものである。この方形土器はカマド周辺からの出土であり、カマドに関わる遺物の可能性も推測されるが、詳細は不明であり、用途等について検討していかなければならない。7・8期（平安時代前期後半）になると、第50・53号住居址の2軒が確認される。ともに大半が調査区外へ続くことから全形は捉えられていない。食膳具は黒色土器・須恵器・軟質須恵器・灰釉陶器が出土しており、多様な種類の土器が認められる。

以上の成果とこれまでの調査成果を合わせて本遺跡についてみていく。本遺跡の南部ではこれまでに7世紀末から10世紀初頭の範囲に収まる竪穴住居址が確認されているが、本調査も同時期の竪穴住居址が確認されており、集落はさらに東に広がりを見せることが示唆される。そして、本遺跡の北部で確認されている7世紀代の竪穴住居址は今回確認されておらず、北部の方がやや早い時期に集落が始まるという見解には変わりはない。また、本調査では本遺跡の北部で出土した円面硯、把手付硯、銅製巡方、黒笹14号窯式に相当する灰釉陶器などの特殊遺物の出土は認められない。以上のことから、本遺跡の重心はやはり北部にあったとみられる。

### 平安時代前期以降（9世紀以降）

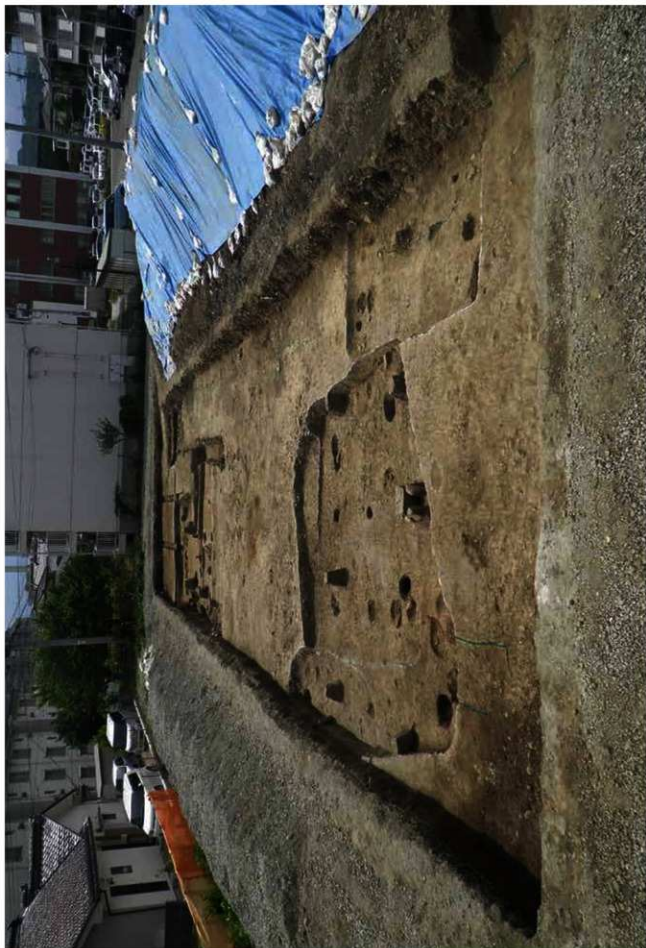
平安時代中期から中世にかけての遺構や遺物は確認されていない。近世の遺構や遺物は、陶器の甕2点が正位に据えられた土坑と石列2本などが確認されている。これらの用途等の詳細は不明であるが、近世にこの土地を利用していたことが示唆される成果である。近年、松本市では松本城跡や松本城下町跡といった近世の発掘調査が頻繁に実施されているが、今回の調査により城下町の外側の様相を知る手掛かりが得られた。

最後に、本調査に際し多大なるご協力とご理解をいただいた松本赤十字乳児院並びに関係機関、元町上町会をはじめとする地元の方々、そして調査スタッフに感謝の意を表して本書の締めくくりとしたい。



# 写真図版





調査区全景（東から）



49 住 完掘状況 (南から)



49 住 遺物出土状況 (南から)



50 住 完掘状況 (北から)



51 住 遺物出土状況 (南から)



51・52 住 完掘状況 (西から)



51 住 カマド検出状況 (南西から)



53 住 完掘状況 (西から)



54 住 完掘状況 (西から)



55 住 カマド遺物出土状況 (西から)



55 住 完掘状況 (西から)



土5 糞出土状況（西から）



石列1・2 検出状況（南から）



第49号住居址出土遺物



第50号住居址出土遺物



第54号住居址出土遺物



第 51 号住居址出土遺物



第 52 号住居址出土遺物



第 53 号住居址出土遺物



第 55 号住居址出土遺物①



第 55 号住居址出土遺物②



第 55 号住居址出土遺物③





須恵器 杯A 墨書「浄」(12)



陶器 甕 (115)



磁器 香炉蓋 (116)



石器 石鏃 S=2/3



石器 打製石斧 (4) S=1/3



金属製品

## 報告書抄録

ふりがな	ながのけんまつもとし たいほうばらいせき だい10じはっくつちようさほうこくしょ							
書名	長野県松本市 大幡原遺跡 第10次発掘調査報告書							
副書名								
巻次								
シリーズ名	松本市文化財調査報告							
シリーズ番号	No.236							
編著者名	小山奈津実、白鳥文彦、直井雅尚、古林舞香							
編集機関	松本市教育委員会							
所在地	〒390-8620 松本市丸の内3番7号 TEL 0263-34-3000 (代) (記録・資料保管：松本市立考古博物館 松本市中山3738番地1 TEL 0263-86-4710)							
発行年月日	2020(令和2)年3月27日(令和元年度)							
ふりがな	ふりがな	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因	
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号					
たいほうばら 大幡原	ながのけんまつもとし 長野県松本市 元町三丁目 312-3	20202	75	36度15分 01秒	137度59分 04秒	2018年4月10日 ～ 2018年6月12日	253㎡	松本赤十字乳児院 建設事業
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
大幡原	集落跡	奈良・平安・近世	竪穴住居址：7軒 土坑：5基 ビット：10基 石列：2本		(土器・陶磁器) 土師器 黒色土器 須恵器 軟質須恵器 灰釉陶器 陶器 磁器 [石器] 石鏃 打製石斧 横刃形石器 凹石 砥石 [金属製品] 鍬 刀子 釘			
要約	・松本赤十字乳児院建設事業に伴う緊急発掘調査として実施した。 ・今回の調査地は本遺跡の南部に位置する。調査では奈良時代から平安時代前期にかけての集落跡を確認し、同時期の土器を中心とする遺物を得た。この成果は、7世紀末から10世紀初頭の範囲に取まる竪穴住居址が確認された本遺跡の南部の様相と同様であり、集落がさらに東に広がりをみせることが示唆される。今回の調査により、本遺跡及び本郷地区の集落の様相を考えるうえで重要な資料が得られた。							

---

松本市文化財調査報告 No.236

長野県松本市

大 輔 原 遺 跡

—第10次発掘調査報告書—

発行日 令和2年3月27日

発行者 松本市教育委員会

〒390-8620

長野県松本市丸の内3番7号

印 刷 有限会社有功社 今井印刷

---